

スイスの時計工場をみる

成瀬政男

スイスの西北に化学工業で名高いバーゼルがあります。このバー

ゼルから南に三十キロほど入った山の中に、ワルデンブルグという村があります。このワルデンブルグにトンメンという工作機械と時計とを作っている工場があります。私はコーラーさんというスイスの人の案内をうけて、このトンメン工場の工作機械の部分だけを見学に参つたのであります。出発の前にコーラーさんから「スイスの時計工場は秘密である。スイス人にも秘密であるから、まして、外人にはこの時計工場の見学は許されない。ただ工作機械の工場だけを見る事が出来る。」と云う事を何度も語されたのであります。それで私も、工作機械の工場だけを見るつもりで、チューリッヒを出掛けたのであります。

バーゼルの東に、リースタールという小さい町があります。ここから線路は山路にかかります。八時四十五分、小型の電車は、私達は数名を乗せて、次々にこの山路に沿って走るのであります。その途中には、ニーデルドルフとか、オーベルドルフとかという名前をもつた、小さい部落がいくつもあります。それらの部落のどこにも実に立派な住宅がたつています。白い煙が、四角な煙突から、静かに出ているのが、誠に平和そのもののように見えました。そこ

に住む人々は、さぞかし、幸福であろうとも思いました。

九時十五分、目的のワルデンブルグに着きました。すぐにトンメン工場に行きました。技術部長のマーチン氏に案内されて、私達二人は、工作機械の工場を見学しました。ここでは、ネジの転造盤を作つて、これを欧州一帯と米国とに輸出しているのであります。また転造盤の工具も作っていました。なおそれらの工作機械と工具とで、実際に、ネジを転造しているところもありました。私も両車の転造を手掛けていますから、このネジの転造には、まことに、興味が持てたのであります。マーチン部長と、転造に関するいろいろな技術上の語をして、これが終つて、わたくしは、ここを辞し去ろうとしました。

突然、マーチン氏は大きな身体を私にのしかけてきます。頑丈な手を軽く私の肩にかけ、口もとに笑みを浮かべながら、「いかがでしょう。時計工場のご見学は。」というのであります。私は自分の耳をしばし疑いました。スイス人に対してさえも秘密にしているという時計工場を、外人人のこの私に見せるのであろうか。私は返事に困つて立止つた。脇に聞いていたコーラーさんが口をそえて、

「せつかくのご厚意ですから、時計工場の見学もお願いしたらいかがでしょうか。」と云われるのです。そのまゝマーチン氏は「どんな、先に進みます。私達はその後が続いて行く。」

すぐに時計工場に入る。時計工場は工場の中央にある。三階建ての立派な建物である。まず地下室へ降りて行く。そこはプレス工場であつた。沢山の小型のクランクプレスが動いている。地板の穴をプレスでぬいているのである。マーチン氏はプレスの型を一つ取つて、これを私に見せる。「この型を作るのが存外むづかしいのでして。」と云いながら、先へ進んでいく。

地下室より一階を素通りして二階へと昇つていく。部屋の中央はふきぬけになつていて、三階の天井から、美しいやわらかい光が、いっぱいに入つてくる。この部屋は恒温室になつていて、摂氏二十度である。よく整頓され、ちり一つもない。まことに美しく、かつ清潔である。思わずコーラさんが「美しいですね。」という。マーチンさんは「まるで劇場の様でしょう。」という。私もこれに和した。

窓は大きい二重窓になつてゐる。ここからも、やわらかい光線が入つてくる。窓の前が巾一メートル位のカウンターになつていて、これが部屋の全体をとりかこんでゐる。ただし通路の所だけは、カウンターは、とり除かれてある。多勢の工員が、このカウンターに向つて、仕事をしている。いずれもルーベを目にあてて、細かい仕事をしている。私達は、窓に向つて仕事をしている工員の肩越しに、その手で作られている部分品をながめながら、順々に、部屋から部屋へと歩いていく。初めの方は、テンブのバランスをとつてゐる所

とか、センマイを入れている所とか、宝石の軸受を調節しているとか、部分品をつくる部屋である。ある所から先の部屋になると、これらの部分品が集められて、次々に、時計の型になつていく。組立ての所になつてくるのである。また別の部屋では、歯車を作つてゐる。その歯切り機械は、この工場で、特別に作つたという専用機である。いくつもの歯切り専用機が並んでいて、これらが、いっせいに運転している所は、まことに壮観である。出来た歯車はシッポの投影器にかける。歯車を百倍に拡大して、紙に画いた模範とくらべながら、その精度を測つてゐるのである。われわれはいくつもの美しい部屋を通つて、最後の部屋に行く。ここでは出来た時計の精密検査をしている。自動捲きの試験もしている。歩度の狂いも調節している。落下試験もしている。水密試験もしている。最後に、部屋の一隅では、出来上つた時計を箱に入れて、発送の仕事もしている。

やがてもつと美しい部屋に通された。そこにゐる重役に紹介された。メイヤー氏という。時計担当の部長である。コーラーさんと私の兩人は席をもらい、一つの大きなテーブルを囲んで、お互に話を交へだした。「ありがとう御座いました。私がこの時計工場を見学させていただいた、ただ一人の日本人だと思ひますが。」と私は感謝の意味をこめて、この言葉をいつた。メイヤー氏は「いいえ、もう一人の方があります。あなたより先に、この工場をご覧になつてゐます。」私はいささか驚いて、「その方はどなたでしょうか。」といつた。メイヤー氏は、「私のところは日本に代理店があります。その代理店の社長さんが、ここに参つております。その方があなたより先に、この工場を見学なさいました。」「代理店は何と申しましようか、」と私は聞いた。メイヤー氏はつと立つて、別の場所に

いく。やがて、書いたものを探し出して、これを私に見せる。見ると、それは名古屋市瑞穂区堀田通三ノ十二瑞穂商會社と読めた。そしてその社長さんが、岩田さんという人であることも知られた。「この写真をご覧下さい。これが社長の岩田さんのおいで下さった時の記念の写真です。今のこの部屋でとった写真です。」メイヤー氏はかく云いながら、その時の楽しかった思い出を私に語る。

メイヤー氏は云う。「せつかくこの様なへんびな所までおいで下さいました。お昼を召し上つて、もう一度、この工場をご覧下さいませんか。ここにはもう一つ、別の工場があります。その工場では航空計器を作っています。これも実は秘密にしている所ですが、せつかく遠方からおいで下さいましたので、ご覧をいただきたいと思ひます。」私はこの厚意を感謝した。

マーチン氏に案内されて、コーラーさんとわたくしは、この部落のただ一つのレストランだと云う、ガストホフ・レーウエンという料理屋に赴いた。席はすでに用意されてあつた。定めの席に落着いて、三人は、共に食事をしながら語り合つた。「この会社は創立以来本年までで丁度百年になりました。私の祖父は、この会社で働いて、その一生をここで終えました。父も又祖父に従つて、一生をこの会社で働き続けました。私も二人に従つて、若い時から、ずっとここで働いております。わたくしもここで生涯をつとめぬくわけです。祖父と父と私との三代で、丁度、九十七年間この会社に勤め上げた事になります。」私はこのマーチン氏の話で思ひ出して、試みに聞いてみた「スイスの時計会社では、親子、それに孫と

三代にわたつて一つの会社に勤めるときには、会社から特別の優遇が与えられると聞いておりますが。」マーチン氏は私のこの質問を聞くや否や、つと、内ポケットに手を入れて、そこにある紙入れを取り出した。しばしその紙入れをさぐつて、そこから一枚の写真をとり出した。そしてそれを私の目の前に示した。「会社のお蔭でこの様な家が自分のものになりました。私には分にすぎたものだと思います。」私はこの写真を手にとつてながめた。見ると実に立派な邸宅である。私は私の側にいるコーラーさんに、この写真を示しながら、マーチン氏にたずねた。「まことに立派なお宅であります。して、どちらにお建てになりましたか。」「この下の部落のニードルドルフに建てました。父の家はその近くのオーベルドルフにあります。」私は今朝、この会社に来る電車の中からみつけた、ニードルドルフとオーベルドルフの近くにある立派な住宅を思ひ浮べた。

それではあそこにあつたあの立派な邸宅は、やはり、このマーチン氏の様に、何代もの時計の会社に勤めた人々が、会社から贈られた建物であるかと思つてみた。そして、四角な煙突からゆるく立昇つてゐる白い煙を思ひうかべながら、もう一度、その家に住む人々の幸福を忍んでみた。そしてマーチン氏に向つて、「あの電車の中でここに参ります途中、私はこの様な建物を沢山見つけましたが、」マーチン氏は言葉を発しない。ただ黙つて私の言葉にうなづき、やがてコーラーさんから渡された写真を受けとつて、またこれをもとの紙入れに丁寧に取り入れた。

突然マーチン氏は云う。「あの電車です。昨年までは蒸気機関車で走つていました。昨年三百万フランの予算で、これを電車にかけ

代えました。この川上に発電所をつくりました。蒸気機関車で運転しました時には、石炭だけでも、年に十三万フランも使いました。それが今はどうでしょう。電気は年にわずかに二万五千フランを使うばかりです。やはり何と云つても白い炭です。白い炭が無限に山に落ちて来ます。この白い炭が、私の国の富の一つをつくつてくれているのです。

おりから、このレストランの主婦が、挨拶に来た。三人はこどもも、この主婦と話をまじえた。

食後のアイスクリームとコーヒーをとつて、三人がこのレストランを出たときは、丁度、午後の一時であつた。

マーチン氏に伴なわれて、もう一度、工場へ行つた。時計工場の見残した所を、また、ゆつくりと見せてもらい、ついで航空機のメーターの工場の案内をうけた。更にマーチン氏の居室の隣りになつてある時計の研究室の案内までもうけた。この研究室では時計の運動を測定し解析し研究している。時計のどこの部分に誤差があるかを発見する装置もあつた。ゼンマイの疲労を測定する装置もあつた。シップの各種の測定器もあつた。投影機もあつた。時計用の歯車は先にも述べた様に、この社独特の歯切り機械で切つたものをこの投影機にかけて百倍に拡大し、一方紙にかいた図面と比べてみて、その精度を測定していた。

窓越しに向うを見ると、山の上に城址が見える。マーチン氏はこれを指さして、あれはハープスブルグ家の城であつたと云う。この

ハープスブルグ家では、スイスの北部、ブルツグの近くからおこつて、遂に欧州大陸のほとんど總てをその手に収め、ウイーンを中心にして世界最大の國家をつくつたのだと話す。このワルデンブルグも、ハープスブルグ家の領有地の一つであつた。あの城址はその時の名残りのものである、と説明する。この美しい城址の下は牧場である。十二月の明るい、しかしやわらかい太陽が、いま、ここを照らしている。冬であるというのに牧草がやつやつとした緑の色をしている。この緑の色が眼にしみる様に鮮やかである。

一度マーチン氏の部屋に帰つて挨拶をかわし、ついでマイヤー氏のもとに來た。マイヤーと二人で署名して、名古屋の瑞穂商事会社に絵はがきを送つた。我々はお互に挨拶を交し合い帰途についた。満ち足りた心持で、コーラーさんと共に、今朝來た道をリースタールへ帰つて行つた。リースタールからオルテンへ、オルテンからチューリッヒに帰つた。チューリッヒに着いたのは夜の九時過であつた。

後記

この文章は、録音器をつかつて作つたものである。著者が、思いでるままに、旅の記憶を、録音器にむかつてふきこんだものを、委員が、このような文章にしてくれた。文章にするまでには、苦心があつたことと想像する。著者は委員の労を多としている。

(精密工学科教授)